様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００７３５

研究課題名（和文）西アジア新石器時代における社会の複雑化

研究課題名（英文）Social complexity in the Neolithic West Asia

研究代表者
三宅　裕（Miyake, Yutaka）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：６０２６１７４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではトルコ共和国南東部に位置するハッサンケイフ・ホユック遺跡から出土した遺構や遺物の分析を中心に、先土器新石器時代における社会の複雑化について検討を進めた。その結果、先土器新石器時代には、儀礼祭祀に関係する公共建造物や奢侈品・威信財が多く認められ、長距離交易ネットワークの形成や複雑な葬送儀礼も発達していたことが明らかになった。これらは農耕牧畜以前に社会の複雑化が進行していたことを示すものであり、「複雑な狩猟採集社会」が形成されていたと評価できるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「新石器革命」と呼ばれるように、狩猟採集から農耕牧畜への移行は、人類史における一大画期と捉えられ、その考えは一般社会にも広く浸透している。しかし、西アジアの先土器新石器時代において、狩猟採集に基盤を置きながらも、社会の複雑性を発達させた社会が存在することが明らかになり、社会を変容させる要因として経済的側面にだけ注目していては十分でなく、むしろ定住化、出自集団などの社会組織の形成、宗教的イデオロギーや儀礼祭祀の発達など、社会的側面を検討していくべきであるという新たな視点を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：This research has focused on the development of social complexities in the Pre-Pottery Neolithic in southwest Asia, mainly through the analyses of the archaeological evidence from Hasanakeyf Hoyuk, a Pre-Pottery Neolithic site in southeast Anatolia. The development of communal buildings, which are closely related to ritual activities, luxury items or prestige goods production, long distance trade network and complex mortuary rituals indicate that these communities can be interpreted as "complex hunter-gatherer societies" with the advanced levels of social complexities.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：新石器時代　社会の複雑化　公共建造物　威信財　長距離交易　葬送儀礼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

今から約 1 万年前に、世界に先駆けて狩猟採集から農耕牧畜へと移行した西アジアでは、G.チャイルドの「新石器革命」論に代表されるように、食糧生産経済の開始が社会に大きな変革をもたらしたと理解されてきた。その一方で、新石器時代の社会自体については、農耕が開始されてまだ間もない時期であったことから、「初期農耕村落」という用語に象徴されるように、比較的単純で平等主義的な社会であったと考えられてきた。

しかし、近年の考古学的調査の進展により、新石器時代の前半にあたる先土器新石器時代において、公共建造物の存在、シンボリズムの発達、特殊生産や長距離交易の発達など、社会の複雑化が進展していたことを示す考古学的証拠が数多く認められるようになってきた。特に、トルコ南東部のギョベックリ・テペ遺跡での発見は、その時代に祭祀センターと評価できるような遺跡が存在し、モニュメントと呼べる大規模な祭儀建物が造営され、儀礼祭祀が盛んにおこなわれていたことを明らかにした。その一方で、遺跡から出土した動植物の分析によれば、ムギ類は利用されていたものの形態的にはまだ野生型であり、動物利用の様相はガゼルの狩猟が中心で家畜を飼育していた証拠は認められないことが明らかになっている。すなわち、先土器新石器時代の初頭にはまだ農耕牧畜に基づく農耕社会は成立しておらず、その時代に認められる社会の複雑化を進展させた社会は、食糧生産経済とは別の要因によって形成された可能性を考える必要がでてきた。

２．研究の目的

本研究では、西アジアの先土器新石器時代において、農耕・牧畜に基盤を置く社会が形成される前に、すでに祭祀センター的な性格をもつ遺跡や儀礼祭祀に関係する公共建造物が存在し、高度な工芸技術、複雑な葬送儀礼、シンボリズムや長距離交易の発達などが認められるという最新の調査成果に注目し、新石器時代初頭における社会の複雑化の実態を解明することを目的としている。

公共建造物は一般の住居跡よりも規模が大きく、石柱やベンチなどの特別な施設を伴うことが一般的で、その造営に際しては多くの労働力と資材が投入されたと考えられる。その背後には、多くの労働力を動員することができ、経済的基盤をもっていた社会組織の存在が想定される。先土器新石器時代、あるいは定住狩猟採集民社会という背景を考えると、リネージのような出自集団がその可能性としては最も高いと考えられ、祖先祭祀に関わる祭儀が重要な役割を果たしていたと推測される。複雑な葬送儀礼は直接の祖先を祖霊に昇華させるために発達したと考えることができ、高度な工芸技術や長距離交易の発達は、儀礼祭祀の発達と不可分に関係していると考えられる。本研究では、これまでに実施してきた発掘調査によって得られた資料に加え、西アジア新石器時代の資料を広く集成・分析することを通じて、当時の生業の実態と社会のあり方の関係について再検討し、経済的側面だけが社会を変革する要因ではなかったことを示すとともに、定住化からイデオロギー、社会組織の形成まで、社会の複雑化をもたらした可能性のある要因について幅広く検討することを目指した。

３．研究の方法

これまでに本研究に参画するメンバーが中心となって発掘調査を実施してきた、トルコ南東部ティグリス川上流域に位置する新石器時代の遺跡であるハッサンケイフ・ホユックからは、公共建造物と考えられる特別な建物、主に墓の副葬品として出土した奢侈品と評価できる器物、そこに表現されたシンボリズムの発達、人骨に彩色を施す複雑な葬送儀礼、地中海産の貝製ビーズに代表される遠隔地の希少な物資などの資料が得られていた。

本研究ではハッサンケイフ・ホユック遺跡において補足的な発掘調査を実施して、社会の複雑化を示す資料のさらなる充実を目指すとともに、現地の博物館等に収蔵されている出土遺物について詳細な観察・分析を進めることとした。関係する資料は多岐にわたるため、研究代表者・研究分担者が中心となって、それぞれが担当する資料を決め、分担して研究を進める体制を整えた。さらに、必要に応じて同時期の他の遺跡の資料も集成して、先土器新石器時代の社会の複雑化について比較研究も進めた。

４．研究成果

ハッサンケイフ・ホユック遺跡

ハッサンケイフ・ホユック遺跡は面積が約 3 ha の小規模な集落遺跡で、遺跡周囲の平坦面から約 8m の高さを有すテル型遺跡である。遺跡の東側斜面下部に設定されたトレンチ（G15 区）では、自然堆積層まで到達することができ、新石器時代に形成された人為的な堆積層は約 9.5m にも及ぶことが明らかになった。新石器時代初頭の期間にこれだけの厚さの人為的堆積層が形成されたということは、定住を基本とする居住様式が長期にわたって継続的に営まれたことを示している。

新石器時代の層位は少なくとも 2 つの時期に区分することができ、下層に当たる第 1 期では遺構の平面形が円形であるのに対し、上層の第 2 期になると隅丸方形へと変化することが明ら

図１　ハッサンケイフ・ホユック遺跡

かになった。平面の形状は異なっているものの、いずれも竪穴状の半地下式構造であることは同じであり、構築技術にも大きな違いはみられない。西アジアでは先土器新石器時代 A（PPNA）期から PPNB 期へと移り変わる頃に、住居跡が円形の半地下式構造から方形の地上式建物へと変化することがしられており、本遺跡の第 2 期の建物もそうした大きな変化の中における過渡期的段階に相当すると評価することができる。

建物の竪穴の深さは遺構によって異なるものの、残りのよいものでは約 2m の深さに達する例もある。壁には川原石が用いられ、石壁の内面には黄褐色の粘土が厚くコーティングされる。この粘土は乾燥して硬化すると堅緻になり、壁の目地土としても利用されていることから、遺構の地下部分はたいへん堅固なつくりとなっている。このように、竪穴の掘削にはじまり、大量の石や粘土の調達、屋根などの上部構造の構築など、住居の構築には相当の労力が投入されており、恒久性の高い建物であったとみることができる（図 1）。

遺跡中央部に設定した発掘区では、特に第 1 期に帰属する円形の遺構がお互いに接するような状態で密集して検出された。発掘調査と並行して実施した、磁気探査や地中レーダー（GPR）による地中探査によって、こうした遺構が発掘区外においても密度高く分布していることが明らかになり、ある程度の人口規模を擁する集落が形成されていたと考えることができる。こうした円形の半地下式建物は頻繁に建替えが行われていたことも確認され、その方法としては本来の建物の壁に部分的に新たな壁を付け足す場合と、遺構全体をひと回り小さくし、本来の建物の内側に壁を新たに構築し直す場合とがある。その結果として、建物が規模を縮小させながら、同じ場所に入れ子状に検出されるケースも少なくない。このように頻繁に建替えがおこなわれていたことは、長期にわたる継続的な居住の証と捉えることができるとともに、それぞれの世帯が自由に家を建てることが許されないような、集落内の「場」に関して何らかの規制が働いていた可能性を示していると言える。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡の場合、人為的な堆積層の厚さ、恒久性の高い建物の存在に加え、150 基近い埋葬が検出されていることや貯蔵用施設と考えられる遺構が存在することなど、定住度の高さを示す資料は数多く認められた。これらはあくまでも状況証拠にとどまるものであるが、ティグリス川上流域の同時期の遺跡であるハラン・チェミでは、淡水産の貝類の成長線分析や渡り鳥の骨の分析の結果、年間を通じてそれらの捕獲活動がおこなわれていたことが明らかになっている。ハッサンケイフ・ホユック遺跡ではこうした証拠は得られていないが、遺跡の状況を総合的に判断してハラン・チェミ遺跡と同様に、通年にわたって居住されていたとみるのが妥当であると思われる。

生業

出土した動植物資料の分析結果によると、ハッサンケイフ・ホユック遺跡において定住集落を営んでいた集団は、基本的に狩猟採集に基づいて生活していたと評価することができる。考古学的な編年の枠組みの中では新石器時代の初頭に位置付けられるが、実際には農耕・牧畜を営んでいたような証拠はまだ認められない。植物資料としては、ピスタチオ、アーモンド、エノキの実が全体の約 75%を占め、それに少量のレンズマメやビターベッチなどのマメ類が加わる。これらは野生の植物であり、採集によって獲得していたとみることができる。新石器時代の初頭に、ユーフラテス川中流域や南レヴァントでは、形態的に野生型の穀物を栽培する、「プレドメスティケーション栽培」がおこなわれていた可能性が指摘されているが、ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、コムギやオオムギ自体がほとんど出土しておらず、その可能性は排除することができる。ティグリス川上流域の同時期の遺跡でもムギ類の利用は概して低調であり、PPNB 期にならないとムギ類の利用が盛んにはならないことが確認されている。

動物骨については、ヒツジとヤギが最も多く、哺乳動物全体の約 60%を占めている。特にヒツジの割合が高いことが特徴であるが、両者はともに形態的には野生であることが確認されている。ほかにはイノシシ（約 10%）やアカシカ、ガゼルが認められ、キツネやウサギなどの小型動物も利用されていた。また、コイ科を中心に淡水魚の骨も大量に出土しており、集落の目の前を流れるティグリス川の水産資源もさかんに利用されていたと考えられる。実際、出土人骨の炭素・窒素安定同位体比分析からは、魚をはじめとする水産資源が当時の人々の食性においてある程度重要な位置を占めていたことも確認されている（Itahashi et al. 2017）。

公共建造物

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、集落のほぼ中央部から、ほかの一般の住居とは規模や構造を異にする特別な建物が検出されている。上層の第 2 期では矩形プランを呈し、下層の第 1 期では円形プランとなるが、これはそれぞれの時期の住居の形状の変化に対応したものとなっている。第 2 期の公共建造物と考えられる 3 号建物は、一辺が約 9m の正方形に近い形状をした大

型遺構で、石灰岩の板石による立石、粘土による基壇状の施設、蓋石をともなう水路状の施設などの特別な施設が付属している。ティグリス川上流域においてもチャヨニュ遺跡やグシル・ホユック遺跡から立石をともなう建物が検出されている。これらの建物は儀礼祭祀にかかわる公共建造物的性格をもつと解釈されており、ハッサンケイフ・ホユック遺跡の 3 号建物も同様の性格をもった遺構であると考えることができる。

図 2　公共建造物（第 1 期）

この 3 号建物の下層からは、第 1 期に帰属する円形の特別な建物が、少しずつ位置をずらすような形で、上下に重なるように検出されている。これまでに 7 基ほどが確認されているが、まだ下層へと続いていくことが確認されており、集落のほぼ中央にあたるこの場所が特別な空間として意識され、それが長期にわたり継承されていたことをうかがわせる。これらの建物の直径は 7m 前後で、同時期の住居跡よりも規模が大きく、礫が密に敷かれたプラットホーム状の施設をともなうものや壁の内面にコーティングされた粘土に白色プラスターが塗られている例も確認された。

工芸技術・長距離交易の発達

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、墓の副葬品として高度な工芸技術を背景として製作された器物や遠隔地の希少な物資が検出されている。新石器時代の埋葬のうち、副葬品を伴うものは全体の約 23%ほどである。副葬品として最も多いのは装身具であり、第 1 期では貝製のビーズが中心であったが、第 2 期になると石製ビーズが主体的になる。装身具の素材とされた貝種には、*Tritia gibbosula*（ヨフバイ科）や *Conus* sp.（イモガイ科）のような地中海産のものと *Theodoxus* sp.（アマオブネガイ科）のように淡水産のものとがある。いくつかの貝種を欠いてはいるものの、地中海産の 2 種の貝はユーフラテス川中流域の同時期の遺跡においても認められるものであり、地中海から直線距離にして 480 km内陸に位置しているハッサンケイフ・ホユック遺跡も広域的な交易ネットワークの中に組み込まれていたことを示している。ちなみに、ティグリス川上流域は地中海産貝製ビーズの分布域の東限に当たるとみられ、約 500 kmという距離も海産貝類が運ばれた事例としてはこの時期では最長の部類に入る。先史時代においては、市場制度のように物資が独立して流通していたとは考えにくく、希少物資の入手を強く希求する社会の形成が前提としてあり、その結果として物資が広域に流通することになったと考えられる。リーダーやエリート層の形成といった社会的不平等の進行が、その背後にはあると思われる。それがもつ社会的意味合いにはやや違いがあったかもしれないが、黒曜石も広域に流通していた物資であり、東アナトリアの産地の黒曜石が遺跡にもたらされていたことも確認されている。

副葬品としては、ほかにも石製のバトンや棍棒頭（図 3）のように威信財的性格をもつと考えられるもの、サソリやヘビなどの動物像が表現された象徴的意味の付与された特別な器物、クロライト製の石製容器や石製装身具のように高度な工芸技術を示す遺物も出土している。同時期のキョルティック・テペ遺跡では、クロライト製の石製容器が数百点出土していることから、専業性の高い生産体制が構築されていた可能性も想定することができる。

葬制

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では 150 基以上の新石器時代の埋葬が確認され、これも長期にわたって居住が継続的に営まれたことを示している。そのほとんどが建物の床下から発見されており、人々が生活していた家は、同時に「死者のための家」でもあったことになる。ひとつの建物から複数の埋葬が検出される事例も多く、その多くが壁際から見つかっていることから、死者を

図 3　棍棒頭（副葬品）

図 4　彩色の施された人骨

たと考えられる。また、人骨の分析では年齢や性別による偏りは確認されておらず、おそらく集団の成員は分け隔てなく、集落内の建物の床下に埋葬されたものと推測される。

人骨の表面に赤色と黒色の顔料で彩色が施されている事例も認められ（図 4)、そうした彩色人骨は全体の約 4 割を占めている。彩色は帯状あるいは線状のモチーフが連続的に施されるもので、単色のものと赤色・黒色が組み合わされている場合とがある。これらの彩色は比較的鮮明でモチーフの崩れなどもみられないことから、人骨の上に直接施されたと考えられる。一度遺体を埋葬して軟部組織が無くなるのを待ってから彩色が施されたと考えられ、再葬の一種であると解釈できる。彩色人骨においても性別や年齢による有意な偏りがみられないことから、特別な地位にあった人物や有力な集団に帰属する人物を対象とした、特別な扱いであったとは考えにくい。ティグリス川上流域の同時期の遺跡からも類例が知られており、むしろこの地域における一般的な葬制のあり方であったと考えるべきである。当時の人々にとっての死は、現代の私たちが認識する生物学的な死とは異なるものであったと考えられ、彩色を施して再度埋葬されることによってその過程が完了すると見做されていたと考えられる。

考察

M.サーリンズはすでに 1970 年代に、農耕の生産性について興味深い指摘をしていた。それは、農耕社会であってもすべてが高い生産性を実現させているわけではなく、「過少生産構造」と呼べるような、生計を維持できる程度の生産レベルで済ませている社会も多くみられるというものであった。そこで機能しているのは、不要なものは生産しないという「反余剰のシステム」であり、そこから脱却するためには、人々に労働や生産の強化を促す圧力が働く必要があるとも指摘していた。すなわち、農耕を営むようになれば自動的に生産力が高まるわけではなく、その潜在力を引き出すためには多くの労働力を投入しなくてはならず、そう仕向けるには何らかの社会的な圧力が必要になるということである。このように、農耕の開始と高い生産性の実現は、必ずしも同義ではないことをまず認識しておくべきである。

古代において都市や国家を生み出した社会がいずれも農耕牧畜を基盤としていたことは間違いないが、西アジアにおいて農耕社会が成立してから都市が誕生するまでに、3 千年以上もの年月を要していることは、あまり注目されることがない。こうした事実を前にすると、サーリンズの指摘はたいへん大きな意味をもってくると考えられ、社会を変容させる要因として注目すべきは、農耕牧畜による食料生産システムの確立そのものではなく、労働を強化させる方向へと働く社会的な圧力、あるいはその機構ということになる。

その意味において、ハッサンケイフ・ホユック遺跡でも明らかになったように、新石器時代初頭の定住狩猟採集民社会がある程度社会の複雑化を進展させていたことは、重要な意味をもつと考えられる。また、その時期にギョベックリ・テペ遺跡のような祭祀センターと考えられる遺跡が存在し、モニュメントと呼ぶにふさわしい大規模な建造物が造営されていたことは、社会の複雑化のスケールが想像をはるかに超えるものであったことを示している。

こうした新石器時代初頭の事例からは、まず社会の複雑化にとって食料生産経済の確立は必ずしもその前提条件にはならないということを確認できる。狩猟採集経済においても生産の強化は可能であったと考えられ、社会的な余剰は公共建造物の造営や儀礼祭祀、威信財を含む特別な器物の生産、長距離交易による希少な物資の入手など、多様な活動に振り向けられていたものと思われる。もうひとつ重要な点は、新石器時代の初頭において儀礼祭祀が社会にとっての主要な関心事であり、それが社会の中心にあったとみられることである。それぞれの集落においては一般の住居跡とは異なる特別な建物が存在し、そこには特別な施設も設けられていることから、集落を核とする集団の祭儀の場であったと考えることができる。それらの建物はイデオロギーを可視化する装置であり、その造営を含めそこで催行される祭儀は、社会を統合する役割を果たしていたと考えられると同時に、その催行を掌握する人物や特定の集団の権威を高める働きももっていた可能性がある。そうした社会的不平等の進行が、特別な器物の生産や遠隔地の希少物資の入手を促したと考えることができる。労働を強化する方向へと働いた社会的圧力に、儀礼祭祀が大きく関係していた可能性は高いと言うことができる。その意味において、前 4 千年紀の都市化の過程においても、神殿とされる規模の大きな祭儀用の建物が都市の中心に造営されていることは示唆的であると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計41件（うち査読付論文　22件／うち国際共著　17件／うちオープンアクセス　18件）

１．著者名 三宅　裕	４．巻 23
２．論文標題 西アジア先史時代における貝製装身具ーその起源から先土器新石器時代まで	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西アジア考古学	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Cucchi Thomas、Domont Auriale、Harbers Hugo、Evin Allowen、Alcantara Fors Roger、Sana Maria、Leduc Charlotte、Guidez Aurelie、Bridault Anne、Hongo Hitomi、Price Max、Peters Joris、Briois Francois、Guilaine Jean、Vigne Jean-Denis	４．巻 11
２．論文標題 Bones geometric morphometrics illustrate 10th millennium cal. BP domestication of autochthonous Cypriot wild boar (Sus scrofa circeus nov. ssp)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Scientific Reports	６．最初と最後の頁 11435
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s41598-021-90933-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Yamada Eisuke、Hongo Hitomi、Endo Hideki	４．巻 132
２．論文標題 Analyzing historic human-suid relationships through dental microwear texture and geometric morphometric analyses of archaeological suid teeth in the Ryukyu Islands	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Journal of Archaeological Science	６．最初と最後の頁 105419～105419
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jas.2021.105419	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hongo Hitomi、Kikuchi Hiroki、Nasu Hiroo	４．巻 11
２．論文標題 Beginning of pig management in Neolithic China: comparison of domestication processes between northern and southern regions	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Animal Frontiers	６．最初と最後の頁 30～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/af/vfab021	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕	4．巻 -
2．論文標題 ティグリス川上流域の新石器時代－ハッサンケイフ・ホユック遺跡とウルス・ダム水没地域の調査－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 第29回西アジア発掘調査報告会報告集	6．最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Carter Tristan、Moir Rose、Wong Todd、Campeau Kathryn、Miyake Yutaka、Maeda Osamu	4．巻 574
2．論文標題 Hunter-fisher-gatherer river transportation: Insights from sourcing the obsidian of Hasankeyf Hoyuk, a Pre-Pottery Neolithic A village on the Upper Tigris (SE Turkey)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Quaternary International	6．最初と最後の頁 27～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.quaint.2020.09.045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Itahashi Yu、Stiner Mary C.、Erdal Omur Dilek、Duru Gunes、Erdal Yilmaz Selim、Miyake Yutaka、Gural Demet、Yoneda Minoru、Ozbasaran Mihriban	4．巻 136
2．論文標題 The impact of the transition from broad-spectrum hunting to sheep herding on human meat consumption: Multi-isotopic analyses of human bone collagen at A??kl? H?y?k, Turkey	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Archaeological Science	6．最初と最後の頁 105505～105505
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jas.2021.105505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 本郷一美	4．巻 -
2．論文標題 外題：自然科学者との共同研究－家畜の動物考古学－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 松井章著作集：動物考古学論	6．最初と最後の頁 108-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Osamu Maeda	4．巻 57
2．論文標題 Qminas in 1981: Excavations of a Late PPNB to Pottery Neolithic Settlement in Northwest Syria	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Orient	6．最初と最後の頁 79-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Maeda Osamu	4．巻 8
2．論文標題 Inefficient practice of flint heat treatment at Hasankeyf Hoyuk: An anti-functional view	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Journal of Lithic Studies	6．最初と最後の頁 85～101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2218/jls.3032	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕	4．巻 -
2．論文標題 初期定住集落の姿を探るートルコ、ハッサンケイフ・ホユックにおける発掘調査	5．発行年 2021年
3．雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会発表要旨集	6．最初と最後の頁 54-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕	4．巻 67-2
2．論文標題 トルコ　バットマン県　ハッサンケイフ・ホユック遺跡の発掘調査	5．発行年 2020年
3．雑誌名 考古学研究	6．最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安間 了・西山伸一・三宅 裕・常木 晃・横尾頼子	4．巻 -
2．論文標題 肥沃な三日月地帯北縁部に分布する新石器時代～鉄器時代遺構の 堆積物柱の元素濃度	5．発行年 2021年
3．雑誌名 都市文明の本質： 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 3　研究成果報告2020 年度	6．最初と最後の頁 195-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中野孝教・ 古里節夫・倉田恵美子・ 千本真生・石田温美・ 常木 晃・三宅 裕	4．巻 -
2．論文標題 イラン北東部サンギ・チャハマック遺跡の祭壇に見られる黒色物の地球化学的特徴とその起源物質	5．発行年 2021年
3．雑誌名 都市文明の本質： 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 3　研究成果報告2020 年度	6．最初と最後の頁 217-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Campbell Stuart、Healey Elizabeth、Maeda Osamu	4．巻 33
2．論文標題 Profiling an unlocated source: Group 3d obsidian in prehistoric and early historic near East	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Archaeological Science: Reports	6．最初と最後の頁 102533～102533
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jasrep.2020.102533	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Odaka, T., Maeda, O., Shimogama, K., Hayakawa, Y.S., Nishiaki, Y., Mohammed, N.A. and Rasheed, K.	4．巻 20
2．論文標題 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Neo-Lithics	6．最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 丹野研一	4．巻 42-2
2．論文標題 デュラムコムギの国内生産のための栽培法に関する基礎研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 龍谷紀要	6．最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Garcia-Martinez Daniel、Bastir Markus、Gomez-Olivencia Asier、Maureille Bruno、Golovanova Liubov、Doronichev Vladimir、Akazawa Takeru、Kondo Osamu、Ishida Hajime、Gascho Dominic、Zollikofer Christoph P. E.、de Leon Marcia Ponce、Heuze Yann	4．巻 6
2．論文標題 Early development of the Neanderthal ribcage reveals a different body shape at birth compared to modern humans	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Science Advances	6．最初と最後の頁 4377～4377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1126/sciadv.abb4377	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Gakuhari Takashi、Nakagome Shigeki、Rasmussen Simon、Allentoft Morten E.、Sato Takehiro、Korneliussen Thorfinn、Chuinneagain Blanaid Ni、Matsumae Hiromi、Koganebuchi Kae、Schmidt Ryan、Mizushima Souichiro、Kondo Osamu、Shigehara Nobuo、Yoneda Minoru et al.	4．巻 3
2．論文標題 Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Communications Biology	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1038/s42003-020-01162-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Matsumura Shuichi、Terai Yohey、Hongo Hitomi、Ishiguro Naotaka	4．巻 38
2．論文標題 Analysis of the Mitochondrial Genomes of Japanese Wolf Specimens in the Siebold Collection, Leiden	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Zoological Science	6．最初と最後の頁 60-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2108/zs200019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕	4．巻 21
2．論文標題 特集北西シリアの新石器時代―筑波大学の西アジア調査から―　総論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西アジア考古学	6．最初と最後の頁 81-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕	4．巻 21
2．論文標題 「農耕牧畜の時代」の狩猟具―新石器時代の尖頭器をめぐって―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西アジア考古学	6．最初と最後の頁 125-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三宅　裕、千本真生、石田温美、田代恵美、板橋　悠	4．巻 -
2．論文標題 初期定住集落の姿を探るートルコ、ハッサンケイフ・ホユック遺跡第6次調査（2019年）ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 第27回西アジア発掘調査報告会報告集(令和元年度考古学が語る古代オリエント)	6．最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hongo, H., Arai, S., Takahashi, R., Gundem, C.Y.	4．巻 15
2．論文標題 Transition to food production suspended; a remarkable development in the Eastern Upper Tigris Valley, South Anatolia	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Documenta Archaeobiologiae	6．最初と最後の頁 155-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Price Max、Hongo Hitomi	4．巻 28
2．論文標題 The Archaeology of Pig Domestication in Eurasia	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Archaeological Research	6．最初と最後の頁 557～615
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10814-019-09142-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Frantz Laurent A. F.、Hongo Hitomi et al.	4．巻 116
2．論文標題 Ancient pigs reveal a near-complete genomic turnover following their introduction to Europe	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Proceedings of the National Academy of Sciences	6．最初と最後の頁 17231～17238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1073/pnas.1901169116	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 本郷一美	4．巻 73 (10)
2．論文標題 ヒツジ・ヤギの家畜化（動物考古学における家畜の研究(6)）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 畜産の研究	6．最初と最後の頁 853-862
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hongo Hitomi	4．巻 19
2．論文標題 Yutaka Tani, God, Man, and Domesticated Animals: The Birth of Shepherds and Their Descendants in the Ancient Near East.</i> Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2017, 217pp.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Japanese Review of Cultural Anthropology	6．最初と最後の頁 063～072
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jrca.19.2_063	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 SASO AIKO、KONDO OSAMU	4．巻 127
2．論文標題 Periodontal disease in the Neolithic Jomon: inter-site comparisons of inland and coastal areas in central Honshu, Japan	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Anthropological Science	6．最初と最後の頁 13～25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1537/ase.190113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 前田　修	4．巻 21
2．論文標題 レヴァント地方における新石器化プロセスの多様性―黒曜石交易からの視点―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西アジア考古学	6．最初と最後の頁 117-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Itahashi Yu、Erdal Yilmaz Selim、Tekin Halil、Omar Lubna、Miyake Yutaka、Chikaraishi Yoshito、Ohkouchi Naohiko、Yoneda Minoru	4．巻 168
2．論文標題 Amino acid 15N analysis reveals change in the importance of freshwater resources between the hunter-gatherer and farmer in the Neolithic upper Tigris	5．発行年 2019年
3．雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6．最初と最後の頁 676～686
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/ajpa.23783	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Ulucam Abdusselam、Miyake Yutaka	4．巻 -
2．論文標題 Hasankeyf Hoyuk Kazisi	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Batman Muzesi Ilisu Baraji HES Projesi Arkeolojik Kazilari	6．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Ulucam Abdusselam、Miyake Yutaka	4．巻 -
2．論文標題 Excavations at Hasankeyf Hoyuk, southeast Anatolia	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Batman Museum the Ilisu Dam HES Project Excavations	6．最初と最後の頁 33-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kasai Norio、Kondo Osamu、Suzuki Koichi、Aoki Yoshinori、Ishii Norihisa、Goto Masamichi	4．巻 12
2．論文標題 Quantitative evaluation of maxillary bone deformation by computed tomography in patients with leprosy	5．発行年 2018年
3．雑誌名 PLOS Neglected Tropical Diseases	6．最初と最後の頁 e0006341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pntd.0006341	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ponce de Leon Marcia S.、Koesbardiati Toetik、Weissmann John David、Milella Marco、Reyna-Blanco Carlos S.、Suwa Gen、Kondo Osamu、Malaspinas Anna-Sapfo、White Tim D.、Zollikofer Christoph P. E.	4．巻 115
2．論文標題 Human bony labyrinth is an indicator of population history and dispersal from Africa	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the National Academy of Sciences	6．最初と最後の頁 4128～4133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1073/pnas.1717873115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Nakayama Mitsuko、Kondo Osamu、Pesonen Paula、Alvesalo Lassi、Lohdesmaki Raija	4．巻 13
2．論文標題 Influence of long and short arms of X chromosome on maxillary molar crown morphology	5．発行年 2018年
3．雑誌名 PLOS ONE	6．最初と最後の頁 e0207070
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0207070	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 本郷一美	4．巻 -
2．論文標題 家畜化は肉食に貢献したか- 狩猟から牧畜への肉食行為の変化-	5．発行年 2018年
3．雑誌名 肉食行為の研究	6．最初と最後の頁 178-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本郷一美	4．巻 144
2．論文標題 西アジアー動物考古学による家畜化過程に関する研究の進展	5．発行年 2018年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 69-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nishiaki Y.、Maeda O.、Kannari T.、Nagai M.、Healey E.、Guliyev F.、Campbell S.	4．巻 online
2．論文標題 Obsidian provenance analyses at Goytepe, Azerbaijan: Implications for understanding Neolithic socioeconomies in the southern Caucasus	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Archaeometry	6．最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/arcm.12457	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Maeda O.	4．巻 -
2．論文標題 Stone balls from Salat Cami Yani and Hasankeyf Hoyuk, Neolithic sites on the upper Tigris	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii	6．最初と最後の頁 261-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Matthews, R., A. Richardson O. Maeda	４．巻 -
２．論文標題 Behind all those Stones: Activity and Society in the Pre-Pottery Neolithic of the Eastern Fertile Crescent	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2	６．最初と最後の頁 377-390
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　3件／うち国際学会　10件）

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 ティグリス川上流域の新石器時代ーハッサンケイフ・ホユック遺跡とウルス・ダム水没地域の調査ー
３．学会等名 第29回西アジア発掘調査報告会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yutaka Miyake
２．発表標題 The earliest sedentary settlement in the Upper Tigris: Hasankeyf Hoyuk and its significance.
３．学会等名 Revisiting the Hilly Flanks: the Epipaleolithic and Neolithic periods in the eastern Fertile Crescent（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 西アジアにおける複雑な狩猟採集民社会
３．学会等名 日本西アジア考古学会第26回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 本郷一美
２．発表標題 家畜化過程における人ー動物関係
３．学会等名 行動遺伝学研究会「家畜化機構の解明」
４．発表年 2021年

１．発表者名 E. Healy, S. Campbell and O. Maeda
２．発表標題 Obsidian in the Near East: New challenges and future directions
３．学会等名 International Obsidian Conference 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 初期定住集落の姿を探るートルコ、ハッサンケイフ・ホユックにおける発掘調査
３．学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会　令和2年度考古学が語る古代オリエント
４．発表年 2021年

１．発表者名 小高敬寛・前田修・下釜和也・早川裕弐・西秋良宏・N. A. ムハンマド・K. ラシード
２．発表標題 新石器化と都市化のはざま－イラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査（2019～20年）－
３．学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会　令和2年度考古学が語る古代オリエント
４．発表年 2021年

１．発表者名 H. Elizabeth, S. Campbell and O. Maeda
２．発表標題 Big data! Obsidian in the Levant
３．学会等名 The 9th International Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 M. Rose, T. Carter and O. Maeda
２．発表標題 Hasankeyf Hoyuk: preliminary results of the geochemical sourcing of obsidian from a southeastern Anatolian PPNA site
３．学会等名 The 9th International Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Osamu Maeda
２．発表標題 Change and continuity in the lithic industry of Hasankeyf Hoyuk: a PPNA huntergatherer site on the upper Tigris.
３．学会等名 The 9th International Conference on the PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Near East（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 前田　修
２．発表標題 西アジアの黒曜石交易と石器文化
３．学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 丹野研一
２．発表標題 テル・エル・ケルク遺跡の考古植物調査から始ま った小麦新品種の開発
３．学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 本郷一美
２．発表標題 「肥沃な三日月弧」北部における家畜飼育の開始と周辺地域への伝播
３．学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 アナトリアからみる北西シリアの新石器時代
３．学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yutaka Miyake
２．発表標題 Yukari Dicle Havzsindaki Ilk Yerlesik Yerlesmesi: Hasankeyf Hoyuk ve Onun Onemi
３．学会等名 3. Uluslararasi Ilisu Baraji ve HES Projesi Sempozyumu（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yutaka Miyake
２．発表標題 Complex hunter-gatherers in the Upper Tigris: Latest discoveries at Hasankeyf Hoyuk, southeast Anatolia
３．学会等名 Neolithic Anatolia: Recent Investigations in Southeast Turkey and the Neighboring Regions（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 石器のシンボリズム：新石器時代の尖頭器をめぐって
３．学会等名 日本西アジア考古学会第23回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三宅　裕
２．発表標題 「定住狩猟採集民」の世界－西アジアの新石器時代から見えてくるもの－
３．学会等名 掘るしんinしののい2019（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yutaka Miyake
２．発表標題 Early Neolithic society in the Upper Tigris: New insights from the excavations at Hasankeyf Hoyuk
３．学会等名 Cultural Messengers in Turkey（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Price, M. and H. Hongo
２．発表標題 Examining the process of early pig management and morphological change in the Tigris River Valley
３．学会等名 13th International Conference of ICAZ (International Congress of Archaeozoology)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eda, M., Hongo, H., Arai, S. and R. Takahashi
２．発表標題 Avian resource exploitation in Neolithic Hasankeyf Hoyuk, Turkey: Bustards for feather and pheasants for meat
３．学会等名 13th International Conference of ICAZ (International Congress of Archaeozoology)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田　修
２．発表標題 石器の加熱処理にみる新石器時代の技術運用
３．学会等名 日本西アジア考古学会第23回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田　修
２．発表標題 クルディスタン原新石器時代における押圧剥離石刃製作の開始について
３．学会等名 日本オリエント学会第60回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maeda, O., S. Campbell, E. Healey
２．発表標題 Obsidian in the Levant: New provenance studies
３．学会等名 The 24th Annual Meeting of the European Association of Archaeologists "Reflecting Futures”（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 R. Matthews, W. Matthews, K. Rasheed Raheem and A. Richardson (eds.)	４．発行年 2020年
２．出版社 Oxbow Books	５．総ページ数 706
３．書名 Early Neolithic Chipped Stone Worlds of Bestansur and Shimshara	

１．著者名 三宅　裕、前田　修	４．発行年 2020年
２．出版社 六一書房	５．総ページ数 578
３．書名 世界と日本の考古学　オリーブの林と赤い大地	

１．著者名 Osamu Maeda	４．発行年 2019年
２．出版社 Astrom Editions	５．総ページ数 511
３．書名 Near Eastern Lithic technologies on the move. Interaction and Contexts in Neolithic Traditions	

１．著者名 井原泰雄、梅崎昌裕、米田穣、近藤修	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 296
３．書名 人間の本質にせまる科学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

筑波大学西アジア文明研究センター
https://rcwac.histanth.tsukuba.ac.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丹野　研一 (Tanno Kenichi) (10419864)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	
研究分担者	本郷　一美 (Hongo Hitomi) (20303919)	総合研究大学院大学・先導科学研究科・准教授 (12702)	
研究分担者	前田　修 (Maeda Osamu) (20647060)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	近藤　修 (Kondo Osamu) (40244347)	東京大学・大学院理学系研究科（理学部）・准教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
トルコ	カラビュック大学	バットマン博物館	ハジェテペ大学	